ボートから教わったこと

20 期 工藤 茂

昨年の 12 月で 60 才を迎え、入社 36 年となる今の会社を無事に定年退職となりました。現在は、その子会社にて働いておりますが、これまでの人生を振り返る機会が多く、ずいぶん歳をとったと実感する日々です。

静岡県東部の沼津市に住居を構えておよそ 15 年が経ち、転勤や出張が頻繁だった頃から比べれば、やっと落ち着いた生活が馴染んで来たように感じます。自宅近くには狩野川という河川があり、いくつか高校の艇庫も存在して、日常的にボートを練習しているところを目にすると、自分もかつては毎日のように練習してたんだなーと感慨深くなります。

今回、このような OB 会誌へ寄稿する機会を得て、ボート部時代の事を振り返ると、結構いろいろな記憶が甦るものだと自分でも感心しました。

ボート部での思い出はというと、まず、なんといっても合宿生活自体の記憶が強いです。そもそも自宅通学だったので、ちょっと集団生活に興味があったこともあり、最初は大部屋での寝泊まりだけでも新鮮な体験でした。よく思い出すことは、実は練習やレースではなくて、やっぱり一年生の時に経験する賄い等の雑務の経験です。当時はチャンの連中と順番に担当が廻ってくるので、結構プレッシャーを感じていました。それまで自炊すらほとんどしたことがないところから、何十人分もの食事を作ることをいきなり経験する訳ですから、いろいろと失敗も多く、今でも恐怖で夢に出る時もあります。キャベツの千切りで親指の爪まで千切りにしたり、作るのが遅くなり定刻まで間に合わず焦ったこと、味噌汁に入れるワカメを切らずに入れて、後からこっそりハサミで切断して事なきを得たことなど、話題に事欠かなかったです。

＜ボート部時代の近影＞

肝心のボートについては、全般的にシェルフォアを漕いでいたように思います。入部して最初のレースは相模湖レガッタでのナックルフォアでした。全くの素人が僅か数ヶ月しか練習しないで、いきなりレースに出た訳ですから、かなり緊張しました。確か予選を勝ち抜いて、決勝まで進んでしまい、同じ乗艇メンバーの Y 先輩は優勝する気で我々新人（私を含めて 3 名）に鼓舞したりして、一層緊迫感が増しました。決勝でのレース状況は、前半はかなりいい順位だったのですが、後半では疲労で全身がパンパンになり、顎が上がってピッチについていくことができず、腹切りしてしまったところだけ鮮明に覚えています。この時、悔しさや申し訳ない気持ちが鮮明で、初めてボート競技の難しさを知りました。

＜相模湖レガッタ出漕前の様子＞

その後、2 年生から 3 年生となるにしたがっ

て、ウェイトトレーニングで身体が出来上がり、漕ぐ技術も地道に上達したと実感したものですが、その反面、この競技の奥深さや難しさは身に沁みて感じるようになりました。また、単位取得を両立させるべく、実験レポートをまとめるため、食堂にて朝まで徹夜で作成し、「出艇」の目覚しを聞いて、そのまま朝練したのも、今となってはいい思い出です。

また、3 年生の時かと思いますが、先輩方が古い艇を準備して、憧れのエイトを漕ぐこととなりました。いざ乗艇し練習すると、これまでのフォアとは全く異なり、かなりバランスを取るのが難しく、自分なりにフォームを修正するなどして、いろいろ悩んだように思います。また、今まで慣れ親しんでいたバウサイドからストロークサイドに変更したこともあり、更に深みにはまったものとなりました。

＜卒業式での大学研究室での様子／左端＞

そうこうしているうちに 4 年生となり、卒研にて研究室に入ったことにより、ボートとは少し距離を置くこととなりました。大学生活の中では、実はこの研究室の印象も強く、毎日朝 9 時には必ず顔を出して実験を行なうといった体育会系のような修練の場であったため、クラブ活動の延長のような状態でした。掲載した写真は、何とか無事に卒業となり、やっと開放される気分で弾けた雰囲気を撮影したものです。

ところで、実は 4 回生の夏に、教育実習にて中大杉並高校の教壇に立ったことも大きな思い出です。ホームクラスで 1 時限分をフリーに何か話せと言われた時、迷わずひたすらボート部での練習やレースでの話をしました。シェルフォア乗艇での練習で、バウを漕いでいた同期の Y 君がよく放屁するため、真剣に漕げなくなると皆でいじってたエピソードなどです。当時の生徒に結構うけていたように思います。

1985 年の 4 月より、東海高熱工業というセラミックヒータ加熱装置の製造会社に入社、新社会人として名古屋工場勤務でスタートしました。その後約 36 年間、御殿場－仙台－御殿場―名古屋－蘇州－上海－東京－近江八幡と各地を転々と移動し、辛い事も多かったですが、それなりに楽しいサラリーマン人生でした。

＜中国赴任時代の近影／2015 年＞

社会人になって、ボートとの関わりは、初漕ぎに 1～2 回ほど行った程度と薄くなってしまいました。ただ、同じ工業化学科の同学年でチャンに所属していた A 君が 1988 年のソウルオリンピックに出場したのを知った時には、かなり興奮した記憶があります。現役の時は、同じ学科であることから教養実験のレポートを渡すぐらいの付き合いでしたが、それでもレベルの差は違えど顔見知りの出場とあって、誇らしく感じたのを覚えています。

会社員としての経験の中では、中国へ赴任した約 4 年間がかなり印象深いです。日々の業務はかなり内容が濃いものであり、それまでの人生観が一変したように感じます。

特に最初の２年は蘇州にて会社の立上げを経験、いろいろな事が文化の違いでなかなか先に進まず、毎日が苛立つ日々でした。

＜上海ハーフマラソンにて＞

ちょうど、高倉健主演の「単騎、千里走る。」という映画を中国で良く観る機会が多く、現地でのさまざまな障害を乗り越えていくストーリーが自分の仕事内容とシンクロし感傷的になったものです。また、日々の気晴らしに良く近くの公園でジョギングしていたこともあり、そのモチベーションにするべく、数回ほど現地のマラソン大会に出場しています。今思えばいろいろな意味でリスキーな体験となりますが、「加油！加油！」と応援してくれる沿道の人々も多く、完走後には出て良かったと感動している自分がありました。

＜東京赴任／2018 年／プロ尾野球観戦／右端＞

その後帰国して東京赴任となり、中国の抑圧された生活とは裏腹に、かつての仲間と楽しむ機会を多く得られたように思います。この時にボート部 OB 会にも初めて参加し、懐かしい面々と再会して、いろいろと昔の記憶が蘇った次第です。

こうした人生の変遷の中で、何となくボート部時代に聞いた「Rowing out spirit」という言葉が、仕事で壁にぶつかった時などにふと頭に浮かびます。これが正しい語彙であるか不明ですが、体感的にというかリズムとして憶えており、事ある機会に出てくるフレーズです。

意味はいかようにも取れますが、自分としては、ボート競技の経験から、何事においても最後まで諦めずにゴールに向かうよう奮い立たせる気がするのです。ということで、ボートから教わったことといえば、仲間と共に自分の限界に挑戦して最後まで諦めずに漕ぎ続ける、つまり人生を走り続けていくことではなかったかと締めくくって終わりたいと思います。

おわり